

保田与重郎と亀井勝一郎

——日本浪漫派への道——

都 築 久 義

(一)

「『日本浪漫派』広告」は、創刊三十号を記念して、「独逸浪漫派」を特集した『ユギト』の昭和九年十一月号巻末に掲載された。

ここに署名したメンバーは、神保光太郎、亀井勝一郎、中島栄次郎、中谷孝雄、緒方隆士、保田与重郎の六名である。

これが発表されるや、ただちに各紙誌で批判、攻撃の矢が放たれ、大きな反響と話題をよんだ。

わざわざ、たかだか同人雑誌を発刊するに際して、実際に雑誌が出る数カ月前に、「広告」を公表すること自体も異例であるが、一同人雑誌のしかも、まだ「広告」という二頁足らずの宣言文に、すぐさま反応し、十指にあまる論評が、一流といわれる誌紙に登場したことは、これが当時の文壇に与えた衝撃の大きさと、実態を如実に物語

っている。

『日本浪漫派』は昭和十年三月に創刊され、六人で出発した同人も、かまびすしい批判をしり目に、三号、五月号の時点では二十二名を数えるに至った。

創刊されてからも、いわゆる左翼陣営からの非難や攻撃は続けられたが、例の『報知新聞』（昭12・6・3）における「人民文庫・日本浪漫派討論会」を頂点にして、その後は散発的なものとどまった。

その間に、雑誌に発表された同人名も、第二巻第一号（昭10・2）でさらに三名が追加、六月号では十五名、十二年の一月でも、六人の参加が誌されている。そして、廃刊号になった一つ前の第四巻二号（昭13・3）「編集後記」には、平林英子など四名の女性同人の参加も伝えられているから、結局、同人の数は最終的には五十人にも達したのであった。

よく知られているように、『日本浪漫派』は、中谷孝雄、保田与重郎、亀井勝一郎が中心となって発刊が計画され、中谷が、緒方隆士を、保田が中島栄次郎を、亀井が神保光太郎を誘って出発した。

中谷の「あの頃の思い出」（『日本浪漫派研究・I』昭41・11）によれば、『現実』の同人であった彼の妻、平林英子の紹介で、同じく『現実』の同人、保田を誘ったということである。亀井勝一郎が『現実』の創刊メンバーであったことは後述する。

三号を発刊する頃には、一挙に同人が二十二名にも増えたのは、『青い花』が合同し、八名もの大量参加があったからである。

昭和九年十二月、たった一号を出したきりで廃刊した『青い国』は、太宰治、埴一雄、山岸外史、木山捷平、伊馬鶴平（春部）、北村謙治郎、岩田九一、雲山俊之を送り込んだ。『青い国』が『日本浪漫派』に合併するについては、中谷孝雄が勧誘したようである。その間の事情は、太宰治以下、多くの『青い国』同人の回想記に出ているから知られていよう。

『ユギト』は、『日本浪漫派』と姉妹誌的な関係にあったから、同人は両誌に顔を出しているが、初期メンバーは意外に少なく、前記中島の他には、伊藤静雄、伊藤佐喜雄。その伊藤佐喜雄は、晩年『日本浪漫派』（潮新書、昭46・4）を執筆したが、同著の「保田与重郎があるとき私に語った。『緑川って、おかしな奴やでエ。日本浪漫派は東大閥やなんて言いよるもんな。』そう言って保田は笑ったのである。」という一節が、読後に印象深く残っている。

緑川貢は、このグループでは明かに異端であった。彼は、富豪の坊ちゃんでも、帝大に通ったインテリでもない工場労働者だったからである。

『日本浪漫派』のもう一つの顔は、帝大の独文科関係者が圧倒的に多いことであろう。

その原因の一端は、芳賀檀が作った。

芳賀はドイツ留学から帰朝してまもない気鋭の学者。『ユギト』に「古典の親衛隊」を発表し、『日本浪漫派』でも名実ともに有力メンバーの一人となった。彼の後輩を、同人に多数引き入れ、その点でも親分格としての資格を有していた。

こうして同人の経歴・出身を一覧してみると、その共通性は、たとえばしばしば指摘されるように、左翼体験、転向体験者の集まりだともいえるし、大久保典夫がしきりに強調するように、大半が「故郷」を持つ地方出身者だともいえる。

しかし、私がこのメンバーを一瞥して、最初に感じたのは、先述の緑川ではないけれども、学歴が揃っているということである。

緑川の言う「東大閥」というのは、神保、中島、伊藤（静）、大山定一など京大勢もかなりいるので、厳密ではないとはいえ、無学歴の彼から見れば、そう思えるほど、とにかくエリートばかりであることにはまちがいない。

『青い花』同人の二、三の私学出身者を除けば、ほぼ全員が、旧制高校から帝大進学組という、まばゆいばかりのエリート集団だった。それも大半が西洋的教養を身につけ、横文字文化を学んだ者である。あれほど、日本の伝統を重んじ、日本を重視したはずの彼等の文章や文末の執筆年月が西歴で書かれているのは、そのことを思うと、何となく奇異な気がしなくもない。

この集団が、地方出身者で、旧制高校から帝国大学への進学者を多く擁していたということは、同時に、次のことをも意味する。

「新日本主義」ジュニア盤全体を通じて興味ある特色は、いづれも金持の俸で、大学を出てから何年間も親許からの仕送りでのんびりと生活してゐるといふことである。思想的玩具としてのマルキシズムが花火だとす

れば、「新日本主義」は美しい手まりのやうなもので、これなら怪我なくて親御も安心するし、倅もいくら深入りしたって送金をとめられる心配はない。キャプテンの保田がいつてゐる。「僕は一介の文学書生であるゆゑに、政治的大問題は露骨に筆にしない、ただ日本の純美純理にかなった系譜は生きてゆく」と誌す。日本浪曼派はその祭典をしておけばいいのである。まことに／＼他意なし。

右記の引用は、「支那事变」勃発直前の、「日本主義」や「日本的なるもの」が流行しだした昭和十二年六月号の『文芸春秋』に掲載された高原幽の「日本主義者メンタルテスト」からである。

この筆者にしたがえば、「亀井は、函館の秘蔵っ子」であるから、彼の「左翼入りは、坊やが乳母の監視のとゞかぬところで溝に落ちたやうなもので、元へかへっても『転向』などゝはいへない。元々保田などゝ丁度いゝ相棒だ」ということになる。

この種のヤユ的非難は、『日本浪曼派』の対抗誌と目されていた『人民文庫』側からしきりに飛んでいたが、その『人民文庫』もまた、『日本浪曼派』を批判できるほど、決して「人民」的ではなく、やはり中心人物は帝大関係者だった。

それはともかく、この高原幽の指摘は一面の真実を突いていることは否定できない。

同時代にあつて、鋭敏な感受性と歯に衣させぬ鋭い舌峰と手厳しい論考で知られる、板垣直子もその点に着目している。

現代を眼の下にみて、自分自身の趣味なり思考なりを高く生かしきる。この生かしきるといふ自負が彼等にとって大切な態度である。この自由性は、銘々自分の居場所を侵さぬものとして把持する。その悠々さが共通してゐる。従つて今までのところ、こまぎれ的に才能を売る生活をしないで、一貫した対象に向つて活動の方向をもつてゐる。それは彼等に一種の不羈な性格付けをして、いはゆるジャーナリズム批評家と違つて地に足のついてゐる印象を与へる。同人達の心底では、この不羈性に於いては意識的に一致してゐる。また、それぞれの自信ある活動を通すことによつて、彼等自身の考へる新時代の建設と到来を助けることの確信を共通にもつてゐる。

浪漫派のかかる確信は、彼等の大部分が経済的に恵まれた生ひ立ちと生活とをもつてゐることに助けられてゐる。

(『現代の文芸評論』昭17・11 第一書房)

しかし、彼等「日本浪漫派」を名乗つた者の言動が、傍目にはいかように映らうとも、主観的には、彼等は切迫した心情とやむにやまれぬ気持から「日本浪漫派」を宣言したことは、保田与重郎が精力的に発表した創刊事情を述べた文章が伝えてゐる。

ナルプが解体し、文芸復興がささやかかれていた昭和十年前後のこの時期に、一等若い世代である彼等に、「日本浪漫派」を叫ばせたところの、彼等の切迫した心情や、やみがたき感情とは、いったいなんだったのか。

世代的に云つて僕ら青年の経歴の主なる時期は、一九二〇年代の末から三〇年代の始めにまたがる。かつて僕らの日本の過去に於て、かやうなげしい時代の青春を経験した青年の時代はないのだ。この時代に於けるよ

り、人類的良心をさまざまに刺激された世代はかつてない。この狂爛の時代を、一番傷つきやすい年齢に於て感じ、一番痛みやすい時代の心情を以て生きてきた人間の文学を、僕らは今後始めねばならぬ。僕らは立派な芝居の楽屋の汚ならしさを知ってゐたがこの汚ならしさを知りつゝも、僕らは立派な芝居につねに良心によつて不斷の關心を奪はれ、憔悴しい遲滞を恥ぢねばならなかつた。空しく費やされた青春を惜しみはしなくとも、僕はこれら僕の年少の友たちの純粹の心おもうことは近頃とくに激しい。この純粹は誰によつて弁証されることも嗤はれることもあり得ぬ。純粹さを眞に誇りうるものは汚れずに倒れた彼らの精神のみである。(略)懷疑し遲滞し、痛み傷き、ついに美しく残つたものゝみが今後に文学の理想と精神と、さらに氣品とを維持する。現実が完全に保証されることは絶対にない。夢だけがはかない美を残した。この文学のはかなさを自覚した、頭迷の徒のみが、文学する任意職責に、一部のかげひきも、一枚の假面も構想もせぬ。一番若いものだけがぎりぎりのところで語り出した。

右の文章は、『日本浪曼派』発行直前の『ユギト』、昭和十年一月号に載せた「後退する意識過剩——『日本浪曼派』について」という保田与重郎の筆になつた一文である。

「人類的良心」を簡稱し、「立派な芝居」を演じながら、楽屋では汚ならしい振舞をし続けた者への激しい呪詛が聞こえてくる。

彼等は若く、純心であつたが故に、「楽屋の汚ならしさは知りつつ」も「立派な芝居につねに良心によつて不斷

の関心を奪はれ」なければならなかったことが、いっそうみじめであり、それだけに「立派な芝居」を演じた者達への憤怒の情は苛烈である。

かけがえない青春の「純粹の心」を傷つけた者への怒りがみなぎっている。

それはともあれ、保田の言う「一九二〇年代の末から三〇年代の始めにまたがる」時期に彼自身はいったい何をし、何を感じていたのであろうか。

年譜によれば、一九二八年（昭和三年）に大阪高等学校に入学している。二年後の一月、同級生の田中克己と短歌誌『炫火』を刊行編集。一九三一年（昭和六年）同校を卒業し、東京帝国大学文学部美学美術史科に入学。翌年大阪高校の同窓生達と『ユギト』を創刊した。

しばしば指摘されるように、『ユギト』が創刊された一九三二年（昭和七年）というのは、プロレタリア文学最後の昂揚期であり、日本プロレタリア作家同盟が国際革命作家同盟に日本支部として加盟し、ナルプと称し始めた年である。一月には、機関誌『プロレタリア文学』が発刊されている。『ユギト』はその三月に出た。

高校時代の保田が、時代を風靡したマルクス主義にどれほど傾倒し、どの程度かかわったか、特に実践活動をしたのかどうかは、諸説あって定かでない。

とはいえ、彼がマルクスに関心をもち、かなり勉強した事実は彼自身も否定していない。

昭和八年五月号という時間的には比較的早い時期の『ユギト』の、「小林多喜二氏の怪死」を知り「慄然となった。」ことを綴ったエッセイで、

文学や哲学が、處生訓となった時代は過ぎたとその昔に考へたことがあった。僕は経済の書に生活の精神的（一）安心を求めやうとしたのである。いま僕はそんな安心は徹することであると考へてゐる。（略）文学の道は大丈夫の道でなくてはならぬと考へて、実にいひしれぬ責任と安心とをこもこも感じた。

とも書いている。

「昔」がいつだとは明言していないが、それが高校時代を指すことは異論の余地はあるまい。

高校時代の保田与重郎を、マルクス主義運動に焦点をあてて考察したすぐれた論考に、磯田光一の「ナシヨナリズムの美学——ユールリッジと保田与重郎」（『比較転向論序説』勁草書房、昭43・12所収）がある。

私は高校時代に保田がかかわった短歌誌や校友会誌を突見していないので、ここでは磯田の引用を借覧して論を進める。

磯田が引用している十数首の短歌のうち、私がかもとも興味深く感じ、印象的だったのは次の三首である。

ひそやかに母嘆ずらく国禁の書によみほくる長男をもつ

あがはゝも悲しとおもへどうつしみる容るゝに若き子供かなしも

冷やかに父と争ふ卓の上の鳳仙花の花いくたびちぎりし

当時、思想犯で検挙した者に、官憲の転向を勧める常套手段が、家族肉親の嘆きや話を聞かせることであったし、事実転向者の多くが、そのことで転向したことはよく知られている。

また、大多数の庶民の親達は、息子が「赤化」することを嘆き、そのために親子の葛藤や争いがあったことも、数多くの小説、物語が伝え、さまざま悲喜劇が演じられたこともそれ等は語っている。

この歌には、大和、桜井の富豪、保田家での息子の「赤化」をめぐる親子の葛藤が赤裸々に表現されているが、私にはこの歌の背後に、母の嘆きと父の説得の前に屈せざるをえなかった若き保田の屈辱感が色濃く表出されているように思われてならない。

「人類的良心」と「正義」を、個人的エゴイズムで圧殺することは、正義感と純情にあふれ、鋭敏な感敏性とエリート意識が彼の心中を一方で支配していたであろうだけに、その屈辱感には想像を越えたものがあつたと思う。

私の理解した範囲では、磯田論文の特徴と結論は――

保田の自意識は「母」の自律性（あるいは土着的領域の自律性）を彼に認識させるとともに、彼をして充足した実践者から截然とへだてる根拠を与えていたと思われる。彼は終始一貫して「渴望する人」であり、けつして「行動する人」にはなりえなかった。そして渴望の裏にはたえずデスペレートな心情が附着していたのである。

常々、精神領域と実生活の領域とを截然と分かつ論法で切り込む、磯田らしい立論である。保田のマルクス主義離脱の理由として「母」の存在にウエイトを置く着眼は私も賛成である。

しかし、保田が、実践を断念することによって、「終始一貫して『渴望する人』」であったとする見解には、戦時中の保田の言動を戦時協力といった点から救済したい、とする磯田の言外の思惑がうかがわれ、私は同意しがた

い。
後述するが、保田にとっては、戦時中の彼の言動が、結果的に戦時体制に奉仕し、協力したことであっても、だからといって何等、彼が救済される必要のないことであつたと思う。

彼にとつて嫌悪すべきは、時流や風潮に便乗したり、権力に追従したり、自己を欺くことであつて、その対象が何であれ、情熱の赴くままに、自己に忠実に生きることに、決して迎合や自己欺瞞をしないこと、すなわち、精神の清らかさ、純粹さだけが、保田にとっては問題だったのである。

したがって、小林多喜二とは思想的立場は異にしても、自分の信念のために命を賭けたという一点には、「慄然」とし、共感した（『ユギト』昭8・5）し、外見的には、思想上の立場を同じくする者でも、それが時流への便乗であつたり、単なる処生術である者の言動は、憎悪し、許し難かつたことはいうまでもない。

彼が「終始一貫」したのは、そういうモラルを自らにも課し、他者に対する評価の基準も、そこにあつたということである。むしろ、彼がそれを生涯実践したのは、敗戦後の沈黙、決して時流や風潮に迎合しなかつたという点を想起すれば十分であろう。

(二)

「日本浪漫派」総体の典型を、保田与重郎とみるか、亀井勝一郎とみるかは、今日、必ずしも定説があるわけではない。

ただ、雑誌『日本浪漫派』はすでにくり返し記述したように、昭和九年十一月に『ユギト』に結成宣言を發表し、同年三月、創刊号を發刊。昭和十三年八月、第四卷第三号を以て終刊したのは、儼然たる事実である。

そして、この雑誌に関していえば、編集所は亀井勝一郎のところにあり、編集後記も、保田は二回（うち一回は亀井と一緒に）しか執筆しておらず、亀井は、通算二九号のうち、約半分の十三回にわたって書いているので、明らかに雑誌發行の中心人物は、亀井だったといえる。

『日本浪漫派』に寄稿した作品についても、保田は「文芸時評」や雑文、エッセイが多く、保田の本領である古典物や評論はここにはほとんど發表せず、平行して發行していた『ユギト』や他の文芸誌に載せていたのである。

保田、亀井、そして中谷は、たしかに雑誌發行にかかわる発意者であり、中心人物ではあったが、現実に發行されてみると、それが意識的なのか、結果的なのか、そのあたりの事情は定かでないが、亀井がイニシアティブをとっていたと思われる。

さて、この雑誌の發刊が計画される時点では、保田と亀井は、人間関係においても、二人の文学観においてもかなりの接近と接点が存在していたことは留意しておいてよい。

亀井と保田が接触したのは、高見順の『対談・現代文壇史』（昭32・7 中央公論社）で、亀井が語るころによれば、「ぼくに保田を紹介したのは田辺君だった。」とのことである。

その田辺耕一郎は、『文学』（昭33・4）の「日本浪漫派」特集号の回想文で、「保田与重郎氏とは彼がまだ東大の学生だった頃からよく知っていた。（略）私は毎日のように逢っていた。また、彼を通じて『ユギト』の人たちと親しくした。われわれは近くに住んでいたのである。」と述懐している。

田辺と亀井は、ともに作家同盟に所属し、旧知の間柄であった。そこに、作家同盟の本庄陸男が加わって、『現実』発刊の話が持ちあがるのである。前記対談の伝えるところでは、これを始めようと言い出したのは、本庄陸男だということである。

また、田辺は「ナルプについては、われわれはマルクス主義文芸学の影響から脱皮して、自由な自己を回復することと、政治か文学かとよく二元的に論議されたような莫迦らしいことは棄てて、文学を通してしか作家の思想はあり得ないという、この自明のことを確認して個性を生かした新しい文学を、という点においてみんな共通しているから、そこに一つの解放感の喜びがあった」とも言っている。

すでに、彼等にはナルプの解散を知っても、「どんなショックも受けなかった。」ところに、『現実』同人の共通認識があったことは、作家同盟解体期の頃の旧同盟員の精神位相を如実に物語っている。

この『現実』の創刊（昭和九年四月）を機に、亀井と保田は急速に接近する。亀井は九年七月号『ユギト』に登場し、十月号の文学時評では、保田は亀井の処女論文集『転形期の文学』を書評する。そして、翌十一月号には例

の「日本浪漫派」の宣言広告が載る。保田は、書評で書いている。

僕が亀井と親しく交はるにいたったのは、雑誌『現実』以後である。しかしそのさき既に僕にとって亀井勝一郎は親しい名の一つであった。亀井に抒情的な繊細さを見つけたのは林房雄であったと記憶する。(略)僕は亀井のかく特に最近のものを読んで、少しもプロレタリア文学的なものを考へてゐない。その代りに本当の文学的なものだけ考へてゐる。

かくして保田と亀井が人間関係のうえで緊密となり、もう一つの個性・中谷孝雄とも結ばれて、『日本浪漫派』が誕生したことは、すでに再三言及してきた。

ところで、この章の冒頭で述べたように、「日本浪漫派」の典型を亀井勝一郎と見なす見解がまだ消えないのは、雑誌の事実上の主宰者が亀井であったこととともに、亀井がプロレタリア文学運動の転向者であり、それにもなう『現実』の創刊から『日本浪漫派』の発刊へと歩んでいった彼の遍歴のなかで、これをとらえようとする発想が一方に残存しているからである。

むしろ、そうした発想の背後には、プロレタリア文学運動から欠落し、「日本浪漫派」が提起したものととして、「民族」の問題は認めても、マルキシズムそのものへの疑問や、プロレタリア文学運動のあり方、ないしはその推進者が内抱した偽善、自己欺瞞への懐疑は少なく、プロレタリア文学は「善」であり、「日本浪漫派」は「悪」

である、という先入観と前提がある。

たとえば西田勝のように、「若き日の亀井勝一郎の頭の中から、どのようにして保田与重郎・浅野晃たちがとび出してきたか」(『新日本文学』・昭29・11)といった疑問のなかにそうした発想と処断が典型的にうかがえよう。

そのことはまた同時に、亀井勝一郎のみならず、あの時代に輩出した転向者の、その転向の最大の原因・理由で権力の強制による外圧的なものと見なすか、それとも、それは単なる契機や動機ではあっても決して主たる理由ではなく、むしろ、マルキシズムの理論やその信奉への疑問といった自己の主體的、内発的な結果だ、と見なすかも関連する。

おそらく、西田の念頭には、東大新人会でマルキシズムをすっかり学び、その正しさを確信し、二年余の入獄体験までしている亀井への先入観的期待感があつて、それが、「ファシスト」保田と結びつけるのを妨げているのであろう。

しかし、イデオロギー的観点を抜きにして亀井がプロレタリア文学陣営から離反した、あるいは離脱しなければならなかった理由や当時の彼の文学観を考察すれば、西田勝の驚きはあたらなないと思う。以下、亀井の政治から文学への道程をたどってみる。

亀井は大正十五年に東大の美学科(保田与重郎もこの学科である)に入学し、まもなく新人会に入ってマルクス主義を学び、活躍する。やがて、いわゆる「三・一五大検挙」の直後、昭和三年四月に、彼もおさまりの非合法政治活動、すなわち治安維持法で逮捕され、昭和五年秋まで獄中生活をおくり、「非合法的政治活動を一切しない」

旨の密約で保釈、出獄した。獄中で発病した病の療養のためしばらく静養の後、上京して作家同盟で、「文学」活動をする。

彼の文壇的処女作は、作家同盟機関誌『プロレタリア文学』に掲載された。昭和七年六月号、「創作活動における当面の諸問題」である。

『プロレタリア文学とその時代』（昭46・11、平凡社）の著者、栗原幸夫はこの処女作と亀井の文学的出発について、次のように言っている。

彼はこの処女作で松田解子の反戦小説「ある戦線」をとりあげ、この作品が資本主義第三期の日常生活の特質を描いていないと批判し、客観的真理を忠実に芸術の上に反映することはプロレタリアートの政治的立場（党派性）に立った場合にのみ可能であると主張した。さらに彼は同誌七月号に『監房細胞』について「書き、鈴木清のこの小説を、監房内の闘争が外部の運動と結びつけられていない、と批判した。

以上からもわかるように、彼の批評家としての出発は、完全に宮本顕治や小林多喜二あるいは「ボルシェヴィキ」的批評と軌を一にするものであった。

平野謙も、『文学・昭和十年前後』（昭47・4 文芸春秋）のなかで、彼もまた、この処女論文を引きながら、「当時、私はこの精鋭な亀井の論文をよんで、いくらヤラレても、つぎつぎに指導的理論家というものは出てくる

ものだな、とプロレタリア文学運動そのものたのもしさを改めて再認識する気になった。」と述べている。

ところが、それもつかの間、八月号になると亀井の態度に微妙な変化が表面化する。『プロレタリア文学』の「文芸時評」である。

その後、同志松田に会ったとき、同志松田から私は次のやうな意味のことを質問された。「では一体どう描けばいいのだらう。たとへば一人の女工をかくときでも、現在の恐慌からくるはげしい労働強化のやられているときには、その女工の顔や動作をもっと苦しげにもっと深刻に描くべきなのだらうか」と。

理論がより一層具体的複雑にのべられたからといって、描かるべき人間がより一層具体的複雑になるとは限らない。……私はだいたいそのものを忘れてゐたと思つた。即ち人間を、「生きた人間を描く」といふことを。

亀井は大事なことに気がついてしまつたが、それはまた、当時のプロレタリア文学の指導者となるには、致命的なことを知ってしまったことでもあつた。亀井は次のような結論を下す。

われわれのよき批評家が奪はれたのち、批評は作品のなかに具体的にあらわれてくる人間の解剖をやらずに、むしろ人間の真似をする——正確に云へば階級闘争の真似する猿の解剖をやつた。逆に作家は、階級闘争の真似をする猿を描いた。私は切に、われわれの批評にも、生きた人間を欲するものである。

「われわれのよき批評家が奪はれた」とは、その年の四月検挙された蔵原惟人のことを亀井は念頭においていたであろう。しかし、蔵原の指導理論こそ、当時の作家同盟員に課せられた、いわゆる「政治の優位性」論であり、いうところの政治主義文学論であった。

プロレタリア文学が「生きた人間」を描かず、「階級闘争の真似をする猿」しか描破していないことを知覚してしまえば、蔵原と入れ替って出獄した林房雄の爆弾宣言と造反的執筆活動に賛意を示し、彼と同じ位置にまで亀井が「後退」するのは必然的なことである。

林は出獄後まもない昭和七年五月一九日から二一日付の『東京朝日新聞』に「作家のために——作家の資格と任務と権利と」を発表し、続いて『改造』七月号に「文学のために」を、『新潮』九月号に「作家として」を書いて、「文学者宣言」をしたのであった。つまり、タブーであった「政治」と「文学」の切り離しを主張したのである。

こうした林房雄の一連の発言と動向に対して、亀井勝一郎は「同志林房雄の近業について」を『プロレタリア文学』十月号に書く。

たしかに彼はこの論評で「現在発表されてゐる限りで言ふならば、林君のこの作品における傾向は、日本のプロレタリア文学がいま歩みつゝあるその道から甚しくはづれてゐると考へざるを得ない。」といったふうに、本多秋五の表現を借りれば「三分の一の同感と、三分の二の批判的態度を示した。」（「転向文学論」）のであるが、実はその「三分の一の同感」のところが問題であった。

というのは、林が「ぼくは心をきめた。ぼくは文学に一生をかける」と言えば、それに同意して、「然り／＼ 然り／＼ これは偉大な常識である。」と呼応してしまい、

大切なことは、我々がプロレタリア文学が建設する仕事の異常な苦痛を身にしみて感じなかったことである。政治か文学かではない。組織的活動か創作的活動かではない。文学だ／＼

と亀井は断言してしまったのである。

ここでもし、「文学だ／＼」ではなく、「政治だ／＼」と言えば、亀井は、蔵原の後継者として、あるいは宮本顕治や小林多喜二と並ぶりっぱなプロレタリア文学者として、高い評価を受けたはずである。

しかし、このたった一言、「文学だ／＼」のために、たとい「三分の二の批判的態度を示した」り、林の態度が「階級的分析に対する無関心」といった蔵原流の言辞を羅列してみたところで、正統派の小林多喜二や宮本顕二の目はごまかせなかった。

今から省察してみると、晩年の小林多喜二は、文字どおり死力をつくして、作家同盟内の「右翼的偏向」や「日和見主義」と闘かい、それを摘発したかをつくづくと思ひ知らされる。

それは逆に言えば、自らの「『文学の党派性』確立のために」（『新潮』昭7・4）、彼がいかに死力を尽したかを物語ることもある。

昭和七年四月、地下にもぐり、翌年二月「虐殺」されるまでの一年足らずの文学的活動——堀英之助や伊東継の筆名で執筆されたそれ等の論述には、あたかも死を前にした者が、渾身の力をふりしぼって、党のために闘かう献身的で誠実な彼の姿が彷彿としてくる。

周知のとおり、昭和八年二月二十日、小林は無惨な最期を遂げるのだが、その直前の半年間は、全くこの同盟内に抬頭し始めた危険な兆候との闘いだけに全力を傾注したのであった。

抽象的な形での危険な偏向への警告はすでに発していたが、具体的に名指しで批判し、それが『プロレタリア文学』に載り、公表されたのは、昭和七年十二月号である。

以後続く一連の「右翼的偏向の諸問題」の最初に、「同志林房雄の『作家のために』『作家として』。それに対する同志亀井勝一郎の批判」と章題が設けられ、亀井も弾劾された。

もちろん、小林が指摘したのは、例の「文学だ！」の個所の誤まりである。「明確な階級的・レーニンの規定を含まない文学の主張は、当然右翼にその道を開く。」（傍点原文）と言ひ、「問題の本質をアイマイにして、我々の正しい一般方針と右翼的偏向との間の調停派的役割を果してゐる。」と指弾された。

追い打ちをかけるように、宮本顕治からも「政治と芸術・政治の優位性の問題」(『プロレタリア文化』昭8・1)で「当面の主要な危険を事実においてとりちがえ、右翼日和見主義の本質を隠蔽する調停派的役割を果すことになつた。」と亀井は糾弾されている。

『プロレタリア文学』和和八年一月号でも、中条百合子が「一連の非プロレタリア作品」で、藤森成吉、須井一

を批判し、まさに、同盟内での反右派闘争は激化した。

そして、小林多喜二が虐殺された直後の三月、彼の遺志を確認するかのように、作家同盟常任中央委員会は「右翼的偏向との闘争に関する決議」をし、林房雄をはじめ、亀井勝一郎、藤森成吉、山田清三郎、鹿地亘、川口浩、神近市子、藤沢恒夫、武田麟太郎などが名指して非難・警告されたのである。

ところで手もとの筑摩版『現代日本文学史年表』の昭和八年九月の項に「ナルプ内部の対立激化し、機能喪失」とあり、昭和九年三月の項で「ナルプ解体声明を発表」とある。

「一切の日和見主義的偏向、その妥協主義と闘争し、レーニンの党派性の方向に堅く一致結集しなければならぬ。」と常任中央委員会が決議し、小林多喜二が死を賭して守ろうとした「党派性の確立」は、彼の喪も明けぬうちに、音をたてて崩壊してしまったのであった。

従来、ナルプ解体・瓦解の要因の一つとして、いま見てきたように、小林・宮本などの極端で酷烈な政治主義が指摘される。

つまり、小林・宮本などの地下指導部と、それに追隨した中条百合子などの戦術的誤診がナルプ解体の原因だと力説されている。

しかし、私はそこに力点を置いた見解には少し疑問がある。

というのは、逆に、もし指導部があれほど激越な調子で、右翼的偏向の摘発や日和見主義への罵倒をあびせなかつたならば、この組織は維持できたかと問えば、やはり困難であったと思う。

それは苛烈をきわめた弾圧とは別に、そもそも、多くの同盟員の意識や実感は、すでにマルクス主義を離れていたのであり、意識の底では同意し難いものを持っていたからである。

もし、彼等が心の底からマルクス主義を唯一絶対の正しい世界観と信じていたなら、そこからひき出される「政治の優位性」論も、必然的に承認されなければなるまい。

すくなくとも、彼等はタテマエとしてそれを承認し、表面的にはそれを絶糾してきたはずであろう。革命の到来と理想社会の実現の近きを信じ、それをリードする仲間のなかに自らの身を置くことは、それが非合法の秘密結社であっただけに、正義感を刺激し、ヒロイズムを満足させた。たしかに至福の一時を味わったのである。

とはいえ、その至福はきわめてスティックな生活と感情を必要としたために、彼等はしだいに、そのストイシズムに耐え難くなってきた。もともと、発端自体が、エリート意識からの、ヒロイズムやセンチメンタリズムを大きな要素としていただけに、早晚限界がやってきても不思議ではない。

その点、小林にしても宮本にしても、そのストイシズムに耐えた。とりわけ、文学運動に加わった者にやみがたく底流する名声欲を、彼等は簡単に放擲し、思想に殉じたのである。

小林にはそんな欠点よりも、美点と長所が多すぎる。ぼくなんかの、とうていまねのできない階級的長所／＼の話が、あれだけの文壇的名声（小林の文壇的名声は敵味方共にこれを認める、といふ種類のものでプロレタリア作家の中ではまったく異例といひたいものであった。）の中にあって、平気でそれを捨て、もぐってし

まふといふやうな行き方は、よほどのものでなければできない。敵として×さしむるものを、小林はその全身にもってゐたのである。(×は殺?)

林房雄が小林多喜二追悼号(『プロレタリア文学』昭8・4・5合併号)に寄せたものである。小林多喜二から集中砲火を一身にあびてもなお、敢然と「文学」を主張した林らしい卒直でフランクな発言である。

「あれだけの文壇的名声」を「平気でそれを捨て、」しまゝ小林の姿勢に着眼し、そのことに感心するところに「プロレタリア文学者」に潜在していたものと、その精神位相が露見しているし、それをまた堂々と告白するところに、林の人間味が顕現しているではないか。

小林や宮本にしても、林や、それに追隨する者の発言の背後になにがあり、意識の底流に何が流れているかくらいは、十分承知していたであろう。

しかし、彼等はそれを露骨に口に出して、責めたてるのではなく、あくまで理詰めで、林を詰問した。思想の言葉で語り、思想の次元で彼と彼等を論断したのである。

いうまでもなくそのことがまた、すでに心情の次元で林に同意していた多くの同盟員を苦境におとし入れた。理詰めで問う限り、小林や宮本の主張と発言に勝負があり、のみならずそれを実践している者の発言だけに、重味がある。しかも、見すかされているであろう、ホンネの部分に触れることは巧妙に避けられている。責められる者は真綿で首を締められる思いであったにちがいない。

そうしたところへ、ズバリ、釘を刺したのが、前述の中条百合子の論文である。

当時機関誌の責任者であった川口浩の『文学運動のなかに生きて』（昭49・6、中央大学出版部）によると、この論文の掲載をめぐる紛糾し、同盟員のなかから、中条は、生意気だといった非難が乱れ飛んだということである。ちなみに、中条百合子は次のように言っている。

林房雄や須井一などが一応プロレタリア文学の陣営に属するようにみえつつ、実質においては非プロレタリア的な作品を量において多量生産し、しかもそれがブルジョア・ジャーナリズムにおいてもはやされるのに対し、われわれが一々それを覆すような作品を書いていないという現象から、漠然たる圧力を感じる傾向があった。従前から創作活動旺盛化の課題がわれらの前にあった所から、この気分は、同盟内にあらたな意識で、創作活動と組織活動との統一の問題をまきおこしたのである。そしてこの問題に対する同盟員の感情も微妙な複雑性を示した。

たしかに、作家同盟の目的は、日本に於けるプロレタリア文学の確立、ブルジョアジー、ファシストおよび社会ファシスト文学との闘争、労働農民その他の勤労者の文学的欲求の充足であって、共産党員になることを要求したものでない。

とはいえ、同盟内には共産党のフラクがあったことは誰でも知っていたことだし、この種の運動の主導権が共産

党にあることも承知していたはずである。だからこそ、なまぬるい「文戦」系を圧倒して作家同盟がプロレタリア文学陣営で王座の位置を占めていたのである。それ故、多くの知識人が糾合し、文壇風見鶏のオポチュニストが集まったのではなかったか。

そもそも、プロレタリア文学自体が、はじめから、政治主義の文学であって、それを否定してしまえば、小林や宮本がくり返えし、くり返えし強調したとおり、その存在そのものを否定することになりはしないか。

要するに作家同盟の解体の最大の原因は、指導部の戦術的誤まりよりも、同盟員の精神構造、意識の問題だと考える。あるいは人間的資質により多く帰因するのではないか、と思う。

今日の転向派は、その思想的人格的確信がたとへばレンの如く最初から徹底してゐなかった。人格の一部分に根ざした信念が仮りに彼等の全行動を規定した丈にすぎなかった。だから、後になって、状況の不利を自覚するや、主義と生活を転変することは容易である。(中略)それ故にプロレタリア作家は、思想的に生きる限り転向することはありえない筈だ。(傍点都築)

(板垣直子「文学の新動向」(『行動』昭9・9))

(三)

小林多喜二があゝの無惨な最期を遂げた、昭和八年二月をはさむ、前後数年間、亀井勝一郎にとって、小林の論考

に散見する「若しこの場合我がマルクス・レーニン主義に拠る作家であるならば」という一語にふりまわされ、苦闘させられた時代はあるまい、と思う。

この一語のために、あるいはこの一語をめぐって、彼がどんなに苦しみ悩み、格闘したかは、講談社版『亀井勝一郎全集』第二巻所収の、彼の「ノート」が如実に物語り、一読すれば、彼の苦闘の風貌が読者に伝ってくる。

なまじ彼はマルクス主義に精通し、内外の文献に通じ、そのうえ、たとえそれが一過性のセンチメタルなものであったとはいえ、中学時代に教会に通い、「富める者」の罪意識を感じるほどのナイーブな性格を身につけていただけに、いっそう苦しまねばならなかった。

小林が例の言葉を枕にし、たとえば林房雄の作品の一つ一つを具体的に例証し、どこにブルジョア文学と違うところがあるのか、どこに階級意識や階級分析が提示されているのかと責め、「これをしも作家に対する『観念的』『極左的』『政治主義的』要求であり、指導であると云へるのだろうか。」と結ぶ論法には、それこそ事実在即し、具体的にそれを示したのだから、一点の非の打ち所もないのであった。

それに対して、彼を非難する側は、いささか感情的に、「観念的だ」「政治主義だ」と叫び、「文学は文学だ」と開き直っているに過ぎないとすれば、この論争の勝負は初めから明かである。

亀井はそれを承知しながら、林の発言や主張には、小林に見られる論理性はないけれども、体験的ともいべき林の実感論には、心の底で惹かれていたことが彼を苦しめた。

前述の亀井の「ノート」を見ると、蔵原惟人と小林多喜二の名前が頻出する。蔵原惟人の打ち立てた理論を貫徹

し、実践した小林多喜二は、彼の畏敬の対象であったと同時に、どうしてもそれを論破しなければならない相手でもあった。ちなみに、「ノート」の昭和九年の項に、次のような記述がある。

堀英之助、野沢徹、この反駁——日本の労働運動に対する批判、必ずここまでする事。未だ我々の誰もが、事実上彼らを克服してゐないのである。森山が蔵原を發展せしめ克服したとみるのは、第一に御本人が承知しないし、とんでもないことで、我々はそれほど政治的に低いのである。

ここで亀井が引合いに出している堀は小林、野沢は宮本、森山とは、社会主義リアリズム論で一躍名を売った森山啓のことである。

社会主義リアリズム論が、日本に正式に紹介されたのは、昭和八年二月号、『プロレタリア文学』誌上であった。上田進の訳で、「ソヴェート文学の近状」が報告され、そこに、全ソ作家同盟第一回組織委員会総会でのグロンスキー委員長と、キルポチン書記長の演説を伝えたものであったが、その内容が、「唯物弁証法的創作方法」を排除し、「社会主義的リアリズム及び革命的ロマンチズム」を新提唱したものにだけに、指導部は動揺し、一般同盟員の間では大きな波紋をよんだ。

なにしろ、誰もかれもこれまでさんさん「唯物弁証法的創作方法」なるものに翻弄され、ふりまわされてきたのである。

ところが、いまや本家のソビエトで「宣言や、文学的党派が、芸術作品にとつてかはってゐた時代は、すぎさつた」と断言し、「真実をかく」ことが「社会主義的リアリズム」の方法だと言っているではないか。

「『唯物弁証法的創作方法』といふスローガンは正しくないスローガンなのである。それは問題を単純化してゐる。」とさえ、キルポチンも言っている。

指導部は専ら、「唯物弁証法的創作方法」を至上としてきたてまえ、ここに至って、そのスローガンはまちがひだった、というのでは動揺するの無理はなかったが、一般同盟員は、もう一つの絶対者であるソビエトの指導部からの方針変更だっただけに、この新提唱にひときは解放感を味わつたことであろう。

事実、日本の指導部は、ソビエトと日本の「現実」や国情の違いを力説し、その条件を無視して、「現実」を描くことの非を力説したものの、すでに人々は聞く耳を持たなかつた。

はやくも昭和八年六月には、中央委員に席を持つ者が、堂々と公然の分派活動である『文化集団』を発刊し、新着の「社会主義的リアリズム」の研究と紹介に努めるに至つた。続いて、『詩精神』（昭9・2）、『文学建設者』（昭9・2）、『文学評論』（昭9・3）、『現実』（昭9・4）等の雑誌がそれぞれ同盟員を糾合して創刊された。そして主としてこれ等の雑誌を舞台に、社会主義的リアリズム論争が展開され、その花盛りとなつたのである。

こうした風潮のなかで、亀井も、かねて傾倒しているゴーリキイを中心に、社会主義的リアリズム論の研究に着手し、自らをその渦中に置いた。

ただしこの研究に着手するに際しても、「こゝであせってはならぬことは、この需要に応じて、自分があせりす

ぎ、とんでもないいんちきな評論でその場その場をごまかすやうな結果を生まぬことだ。」と自戒しつつ、「何故にマクシム・ゴリキイに向ふか？」と自問して、

かの自己批判とむすびついた社会主義的リアリズムへの探求が、その背後に作品を有するがためである。そしてゴリキイはその巨匠である。

第二に、ゴリキイの「回想」をとくに選んだことは、その中で彼が彼の同時代人と論争し感銘し、自己の方法を樹立してゆく過程が見事に描かれてゐるからである。彼の方法に接しようと共に他の方法にも接しうからである。

と、「ノート・昭8」で説明していることは留意しておいてよい。

また、別の個所では「多くの批評家は、作家の理性に対してものを云ってゐるが、作家の心理に対してはものを云はぬ。後者は前者よりも百倍も困難であるからだ。自分の興味は只、その心理に対してのみ向けられる。」とも述べている。

亀井は、「回想」から、社会主義的リアリズムの好例として、ロシア革命にかかわった一知識人の伝記「クリム・サムギンの生涯」に研究の歩を進め、さらにドストエフスキイ、トルストイと、社会主義国の巨匠へと向かつてその輪を拡げる。

「ノート」に点綴された著書からの抜粋には、「わが国には人為的に誇張された苦悩が多い。」とか、「自分を強制して人工的にヒロイックな調子に自分の気持を合はせるのは、無意味であり、且つ無理だ」といった調子の章句が見られ、亀井の関心のありようと、心象がまざまざと想像できる。

亀井が「自己批判と結びついた社会主義的リアリズムへの探求」に心がけ、語られた「理性」よりも、語る者の、「心理」にのみ、彼の関心を抱いたとの告白は、彼がやがて歩むであろう方向を暗示している。

そのことは、亀井が終始、小林多喜二の「転換時代」(『党生活者』)を問題にしていることと無関係ではない。この著にわずかに出てくる「名声欲」や「虚栄心」の問題を、彼は見逃さず、「ノート」に摘記していることにもその一端はうかがわれる。

亀井のこの研究成果は、ひとまず「『回想』におけるマクシム・ゴーリキイ——社会主義的リアリズムのより深い理解のために——」と題され、三十頁近い長大論文として『文化集団』、昭和九年一月号に発表されたが、特に「クリム・サムギンの生涯」を精読することによって体得した次の確信は、亀井の転機を確定した、と私には思われる。

「クリム・サムギンの生涯」は、偉大なる同伴者の自己記録である。「偉大なる」とは人間に対する洞察の深さ、真実性の確保である。そしてこの人間——生ける人間をとほして階級を見出してゐるのであって、抽象的な階級理論をとほして人間に到達してゐるのではない。

マルクス主義の理論によれば、その理論によってすべての「現実」が解明され、「眞実」が明かにされるはずであった。ところが、ゴリキイは、「抽象的な階級理論」に依拠せずに、「生ける人間」に対する深い洞察によって、その「眞実性」を確保しているのである。

換言すれば、社会主義的リアリズムの代表的な作品とされる「クリム・サムギンの生涯」には、「抽象的階級理論」による人間観察の姿勢がないばかりか、それに抱泥するかぎり、「眞実性」の究明などはほど遠いことであるということも彼は確認したのである。

実際、謙虚に、深く自己省察してみれば、語られている「理性」の裏では、弱く、醜い「心理」がうごめいている、というのが現実の人間の姿ではないか。

亀井は、そうした発想と立場から、作家同盟が崩壊寸前の状態となって、新方向、方針の転換があちこちで語られている時点で、「故郷へ帰れ」（『人物評論』昭8・11）と主張し「あらゆる論争の前に、先づ僕等が自発的に自己の実体の正確にして無慈悲な再評価に向ふこと」（傍点原文）が「一番大切なこと」だと強調した。しかし、相変わらず、古びた社会主義文学論をふりまわし、自己を偽り、仮面をかぶった論争が横行したために、亀井は、「ありとあらゆる仮面の剥奪」（『文学評論』昭9・5）をと訴え、プロレタリア文学を論じ、プロレタリア文学者と称する者の自己欺瞞と偽善を鋭く糾弾した。そこに語られている言葉は、あの吉本隆明が、六十年安保闘争前後に、戦後の進歩的文化人の欺瞞をあばき、告発した舌鋒を想起させ、七十年大学闘争においての全共闘系学生達が、進歩的知識人の偽善を摘発した口吻を連想させるものであった。

すでに作家同盟は崩壊し、共産党も事実上壊滅したいま、したがって一定の政治的実践を「左翼的口実」として要求されることのない現代にあって、「プロ派の武器をもって芸術派を誹謗し、自らはいつでも芸術派のふところへもぐり込む用意を怠らない一連の人々」(「ノート・昭9」)を亀井は黙許できなかった。「政治的敗北の根柢を自他に向ってゴマ化すもの、及びかやうな嵐を狡猾によけてとほった『左翼文士』」(同前)を、彼は「作家的良心」の名において許し難かった。すくなくとも、亀井自身は彼等の「粉飾を口にすることを生涯の恥とするであらう、」(同前)と決意した。そして、その決意こそが、そうした「左翼文士」との訣別の決意でもあった。

語られた「理性」よりも語る者の「心理」にひたすら関心を寄せ、それをこそ重視するようになった亀井にしてみれば、語られた「理性」がいかにりっぱであっても、それを語る者の心理が、自己欺瞞とゴマ化しと粉飾とに満ちたものであれば、彼は善しとしなかったのである。

したがって「左翼文士」の仮面をあばきながら、一方で、「文学における意志的情熱の相」(『現実』昭9・4)を力説し、「批評以前」(『文学評論』昭9・8)や「文学以前への動き」(『文芸通信』昭9・9)を彼が問題にしたのは当然であるし、それはまた、作られた「作品」よりも、作った者の「心理」に文学的評価の力点を移動したことを意味する。

それ故、彼が「政治と文学について」(『文芸』昭9・9)で、「僕はここに、ブルジョア文学とかプロレタリア文学とかいう観念的差別をさえ撤去していいと考える。」と発言したところで、格別に驚くに値しないし、「階級的自覚といったものの以前、云わばその原始的状态に、何ものにもわずらわされることなき純粹な良心の鼓動だ

けをまず聞こうではないか」との発言は、亀井が紆余曲折、彷徨の果てにたどりついた到着点であった。

そして、その到着点は、二年前の『ユギト』の出発点でもあった。

ちなみに保田与重郎は『ユギト』創刊号(昭7・3)の「編集後記」でこう述べている。

しかし私らは同人雑誌を一つの主義で通してゆく企図をもたぬ。私らは『何の為に』『なに』を書くかと、新しい角度から問ふ以前に、つまり文学の効用をいふが、それ以前に、『なぜ文学する』『文学をしだした』とその生の意識を問おふとする情熱を感じる。

かくして、保田と亀井は、文学的姿勢において一致し、合意したのである。

そればかりか、大学の美学科では後輩の保田に、亀井はしだいに傾斜していく。

「文学と政治——文学における意志的情熱の相(目)」(『現実』昭9・6)で、亀井は告自する。

私は最近保田与重郎のおかげで、「ユギト」の人々の精神に少しづつ触れてゆくことが出来た。(略)

彼等を敵として戦へ、罵倒せよ、とうながす一部の人々が、今日政治か文学かと身をもって生きぬくべき精神を失った人びとであるのをみたとき、私は「ユギト」の人々に対蹠するよりもはるかに大きな激しい対蹠をそれらの者どもに感じなければならなかった。

(四)

「イロニー」という言葉は、「『日本浪漫派』広告」のなかでも使用された保田与重郎の愛唱句の一つである。

この言葉の意味は、さまざまに解釈されようが、たかだか数名の無名文学者が、千五百字、二頁ばかりの雑誌創刊広告を出したところ、たちまち反響をよび、それが予測された方向から、予測された内容のものであった、ということが、実は最大のイロニーではなかったのではなからうか。

のみならず、「日本浪漫派」を非難した連中が、やがて保田与重郎の驥尾に付すにいたっては、もはやイロニーというより、慢画でさえあろう。

広告なるものをよく読んでみれば、やたらに難解で韜晦な言いまわしや用語を使ってはいるが、具体的な主張は何もしていないことに気がつく。

要するに、彼等の眼から見れば、「平俗低徊の文学が流行してゐる」から、「最も美しいものの擁護のため、最も崇高なものゝ顕彰のため、この必至の伝統芸術人復興の使命を、茲に特に高遭急迫に表現する」と言っているに過ぎないのである。

にもかかわらず、浪漫派という言葉に玄惑されたのであろうか、非難する者があれこれの浪漫主義の知識を披瀝し、果てはそれ等とこの「日本浪漫派」と直結して論ずるものだから、ただちに次のような反論を受けることになる。

批判者の罵倒した対象は、彼らの知る浪漫主義であり、僕ら「日本浪漫派」の若干もかゝはるところでない。第一僕は諸君の進んで示した貧弱な知識内容と職業の偽瞞の内幕をこの機会に了解した。

（「日本浪漫派の立場」『改造』昭10・2）

実際、『コギト』はドイツを中心にした外国浪漫派文学の研究誌と称してもよいほど、その研究に力を入れてきた。帝大時代の三年間をこの研究にあてている保田にすれば、批判者の「貧弱な知識内容」を「この機会に了解した。」というのも、あながち大言壮語だとはいえない。

あるいは、保田は「僕らは文学することを架空の無償行為と見、虚構の営みと自覚」（同前）し、「今日は自由主義で明日はマルクスの」となるがとき、売文の徒を軽蔑したところに彼の文学的出発があったのだから、彼の左翼や進歩を誇号する者に対する見方も、身すぎ、世すぎのための口実に、そうした発言をし、ジャーナリズムに媚態を売っている、という手敵しいものである。

眞の芸術家はつねに進歩への俗物的犯罪を告発するために、総じて群衆の復讐にもおそれぬ。芸術家は浮動のファンを作らぬ。進歩を商品化し、大衆を口実化すること、第一に敵する。（同前）

むしろ孤立の孤高を誇ったのであった。

したがって、進歩主義論者や左翼流文学者が、旧来の文学論や観点で批判すれば、

保田与重郎と亀井勝一郎

夢に逃避するとか、現実からの逃避だとか、芸に遊ぶ心だとか、芸術至上主義とか、日本の芸術家ならばときどきに蒙る罵りの言葉のことごとく僕ら自身に投げられるのもみてきた。始めより覚悟である。かういふ覚悟は広告せぬ。僕らは芸術家であるから、芸術を第一義とする。(『日本浪漫派のために』『三田文学』昭10・2)と、高言する。「文学を無償行為」と自覚し、逆に文学の効用を問わぬことが、彼等の文学論の根幹をなしている。とすれば、「芸術至上主義」はむしろ当然であるし、それを否定することは、逆に彼等の存在自体を否定することになる。

非難の声のなかには、彼等には具体性が無い、理論が無い、体系が無いというのもあった。こういった非難に対しては、たちまち、次のような反論が返ってくる。

それへ浪漫的なものVが具体的でないといふ批評については、つひに答へ方をしらなかったし今後にも亘つてもその答へ方を知り得まいと考へられる。(中略)

ある意味で一つの理論と、一つの文学的時代の終焉を予言するものが僕らの浪漫派である。墮落した理論の形式は一面今日の日本の文壇を示してゐる。(『反進歩主義文学論』『日本浪漫派』昭10・5)

それでは、「日本浪漫派」を無視した姿勢をとれば、どうなるか。

下品な作家は、全く意にしてゐないといって、超然とした顔を見せようとした。超越してゐる心を見せようとする、物ほしげな姿はこの上なく興ざめたものである。 (同前)

これでは全く取りつく島がなからう。

作家同盟が瓦解し、保田が亀井勝一郎達と『現実』を出している頃、ホームグラウンドである『コギト』に発表された、「松下武雄のために」と副題のある「深淵の意識」(昭9・5)のなかで次のように書いている個所がある。

僕には事志にたがへば帰るべき郷土がある。しかしそれが僕がかかる上述の言葉を非難する根拠とはならないであらう。少くとも僕はそれを信じる。問題をかゝる金銭に導くか否かにすべての評論がジャーナリズム的であるか否かがわかるのだ。如何に金銭を欲する匂ひのふかい文学が今日市場にあふれ、そして如何に金銭をさもしく求める評論が多いであらうか。しかしもともと僕はそれらをどんな立場からも非難し、又排斥したいとは思ひはしない。僕にはそこに同情をさへ感じられる。しかし文学の道は又自つと別のものであったでなからうか。(略)

経済論をいふ馬鹿もの、といふ人がある。経済論をいはない馬鹿といふ人がある。少くとも僕には何かをいふ必要がない。一体あゝいふことを主として考へねばならぬ人は、ことさら文学を何故選んだのだらうか。株屋になつた方がいゝ人が文学をしてゐる。そしてこゝに文学と現実といふ問題の皮相な課題とその解釈の手がか

りを考へる人たちがゐる。食ふための第一ならばそんなことは文学の上でしなくともよい。勿論食ふてゆくことは、国家によって許された恩恵ではなく人間の権利だらう。けれどそれはますます文学論上の問題でない。

ここにはしなくも、当時の保田の文壇文学者への関心のありようと、文学の理想についての彼なりの見解が露呈し、明示されていよう。

とにかく保田にとっては、左翼を口にし、進歩を論ずる者の悉くは、単にジャーナリズムに登場し、名を売り、金を得ることを欲するだけの者にしか映っていなかったことは、そうした種類の文壇人、知識人への憤怒に満ちたエッセイばかりを發表している事実からも、容易に推察できる。

そして、それら俗悪な文壇人によって、本来、政治や経済とは次元が異り、日常生活の「食ふ」こととはもともと無関係な「文学」が汚されてしまうことが、彼には耐えきれなかつたのであろう。

むしろ、保田が「進歩を商品化し、大衆を口実化」(前出)する連中を口はばかりなく広言できたのは、逆に言えば、彼はそうして、「金錢を欲する」必要がないほど恵まれていたことも看過できない事実である。

この小論の最初でも言及したとおり、保田のみならず、『日本浪漫派』の多くのメンバーは、大学を出てからも親がかりで、自分の書いたものが売れなくとも、とりたてて食うことの心配をする必要がなかつたのである。

なにしろ亀井勝一郎夫人の『回想の人・亀井勝一郎』(昭51・1講談社)を読むと、亀井は結婚しても親から仕送りを受けていたということである。

彼等が、「平俗低徊の文学」を嫌悪し、「不羈高踏」の文学を高唱し、いわば文学を貴族のものに奪回しようとして画策したのは、自らが「貴族」であることをひそかに自認していたとすれば、あるいは当然なことかも知れない。保田与重郎が、文壇、売文の徒に、「金錢をさもなく求めたる人士」と厳しく糾弾したのは、必ずしも昭和年代のプロレタリア文学全盛時代だけではなかった。昭和十年代の半ばの国策文学流行の時代にも、同じ発想で、そうした文士を指弾したことも忘れてはなるまい。

その点を高く評価したのが、かつて『人民文庫』の側から『日本浪漫派』を攻撃した一人であった高見順である。著名な『昭和文学盛衰史・二』で高見は言っている。

この保田与重郎等における反俗精神には、文芸を商売視する俗悪な職業文士に見られない「精神の珠玉」があることもたしかだ。(略)

私は終戦直後——戦争中は、神さまみたいに言われていた保田与重郎が、戦犯呼ばわりをされたとき、保田与重郎というのは、日本の現代評論史において、小林秀雄につぐ人物であると書いたことがある。俗悪な政論的弾劾から、彼の持っていた「精神の珠玉」を守りたかったのである。私は彼の「精神の珠玉」を信ずるのである。

高見順はまた、かつて平野謙が、「人民文庫」と「日本浪漫派」が異母兄妹だと言ったことに対して、当時は憤然としたが、その後この両誌は、やはり「転向という一本の木から出た二つの枝だ」と思うに至ったと告白している。

文学することが、人間の営為のなかで、もっとも至純な行為の一つであるとすれば、文学者自身の心もまた「珠玉」でなければなるまい。

「日本浪漫派」は、なによりも、その文学の「珠玉」の回復を希求し、それを宣した文学運動であった。その結果がおりからの時局に合致し、あるいはそれが戦争体制推進に役立ったとしても、この文学運動そのものの出発の意義とは無縁なことである、と思う。

(文中、亀井勝一郎の引用文は、講談社版『亀井勝一郎全集』に拠った。)